

# 松本清張記念館

◆館報◆  
2002. 8  
第10号

## 模索

— 何本かの試験管を前にならべて



昭和34年(1959)4月初版 光文社

『黒い画集』は昭和三十三年十月五日から三十五年六月十九日まで『週刊朝日』に連載。「遭難」「証言」「坂道の家」など九つの推理小説の中短篇の連作であった。単行本に収められるとき、そのうちの「失踪」が外され、「天城越え」(『サンデー毎日』特別号11 昭和三十四年十月)が加えられた。現在入手できる本

松本清張全集 第4巻(文藝春秋)  
『黒い画集』 新潮文庫(新潮社)

### 目次

- 特集 小林安司先生を悼む……………2
- 特別寄稿「謙抑の人」谷伍平……………4
- 「小林安司先生を偲ぶ」今村元市……………5
- 特別企画展「黒い画集」展……………6
- 松本清張没後十年記念事業……………7
- 友の会活動報告……………7
- 北九州文学マップ……………7
- トピックス……………8

### 作品紹介

『黒い画集』は推理小説の短篇連作集。『週刊朝日』に連載された九作品について簡単に紹介します。

最初の「遭難」は、へ岳人に悪人はいない」という崇高な言葉の陰にかくれた個の悪を、へ可能性の犯罪を、あばく過程を通して浮き彫りにした、山岳ミステリーです。

「証言」では、保身から隣人のアリバイ(証言)を拒否する、中年サラリーマンのエゴイズムとその皮肉な結末に、日常にひそむ不条理の陥穽が見えかくれます。

中年の小間物店主が若い女に貢ぎ、愛欲の嵐にあまり破滅する姿を丹念に書き込んだ「坂道の家」は、殺人トリックにも工夫をこらしています。複雑な失踪・殺人事件の経過をへ実話風に記述する「失踪」では、個人の孤絶が真実を不明にしがちだと語られ、現代社会にも通じる鋭い洞察が見られます。

「紐」は、捜査と真実が二転三転、どんでん返しもあるミステリーですが、死体の首に巻かれた紐の形状など伏線が丁寧にはられた佳品です。

「寒流」では、愛人をめぐって上司と争い、銀行内のへ暖流からへ寒流へへ左遷された主人公が、最後に奇抜な復讐計画を実行します。

「凶器」は、まさにへ凶器をめぐる物語です。ある殺人事件で凶器が出ず、迷宮入り。刑事がある偶然から意外な凶器に気づく結末には、ブラックユーモアが漂います。

「濁った陽」は、汚職事件での課長補佐の自殺の真相を、巧妙なトリックや謎解きの要素を加えて追求した作品です。

「草」は、へ草が主人公の物語です。主人公の入院する病院で、院長と婦長の失踪、薬剤師や事務長の自殺と次々に事件が起きます。意表をつく結末の工夫が光ります。

「各編にバラエティを持たせたい」との清張の言葉どおり、とりどりの味わいが楽しめる作品集です。

(学芸担当 中川 里志)

# 小林安司先生を悼む

松本清張記念館運営委員会委員長、友の会会長として「尽力いただいた小林安司先生が、五月十一日亡くなられました。最後まで北九州の文化の発展に寄与された先生を追悼し、特集記事を掲載します。」

## 赤塚 正幸

北九州市立大学教授

小林安司先生と最初にお会いしたのは、小倉鍛冶町の鵜外旧居で頼まれて話をしたときで、そのとき頂いた名刺を見ると、「自宅の郵便番号が802と三桁で、もうだいぶ前のことになる。その後清張記念館が開館して、企画展の運営委員をやるようになってから委員会などで親しく話をさせていただいた。短い間の浅いお付き合いの中で感じていたのは、小林先生はよく他人を認め肯定する本当に優しい人だということであった。先生が九十歳のとき記念館で講演をされたが、最後の最後まで現役の、大変な先生であった。心から冥福をお祈りする。」

## 安間 隆次

文芸評論家

### 東大俳句会時代

折にふれて伺ったお話の中で、忘れ難い印象を刻んでいる事柄の一つに「東大俳句会」があります。昭和六年、旧制佐賀高校から東京帝国大学文学部に進学された小林先生は、直ちに東大俳句会に参加されたのですが、これは小倉中学（現・高校）の先輩でもある「俳人の神崎縷々さんがね、熱心に勧めてくれたからなんです」との由でした。

虚子の指導する東大俳句会では、一学年上の中村草田男と親交をむすび、武蔵野への吟行を共にしたことも。「吟行のあと、時には杉並の中村さん宅にお寄りして」などと往時を懐かしむ先生のお顔にダブって、草田男のまことに飄々とした風貌がうかび、これは絶妙の取り合わせ、と私は嬉しくなりました。「でもね、東大俳句会では私は、隅の方に黙って坐っていただけなんです」と笑いながら、穏やかな口調で虚子や草田男の思い出を語られる先生の温容はいまも私の脳裡に鮮やかです。残念なのは、先生の当時の句会でのお作を、どうしてもご教示いただけなかったこと。上天に慈顔双ぶや清張忌 隆次

## 小野 昭治

（株）ケイプラン事務取締役

私と小林先生をお引き合わせいただいたのは松本清張先生でした。昭和五十一年だったと記憶しております。当時小林先生は、北九州市立中央図書館の館長をされていらっし

んでいた。

大きい兄ちゃん、後年その呼び名に相応しく北九州・小倉の学術文化の頂点に立たれました。郷土をこよなく愛し、文化向上に終生情熱を捧げられた小林安司先生その人です。

子供の頃の私は、先生を小林の大きい兄ちゃんと呼んでいました。私の友達に次兄のほうでした。

先生は勉強一途な方で、中学生の頃から、何時家に行っても二階の自分の部屋で机に向っていました。その姿は今でも忘れません。懐かしい思い出が次々に臉に浮かび時に涙します。思えば随分と永いお付合で先生からは色々なことを学びました。本当に立派な方でした。今一度お元氣になられ帰宅される日を願っていました。誠に残念です。寂寞の感一入の昨今です。謹んで御冥福をお祈り致します。 合掌 卯句 十一日や巨星地に墜つ五月かな

## 高野 利昭

北九州市教育長

先生におかれましては、記念館の誘致建設段階から現在に至るまで、多年にわたり本市文化行政のために、指導を賜り、心から感謝申し上げます。

先生は、北九州大学（現在北九州市立大学）教授のちに名誉教授から市立中央図書館の初代館長という重責を担われ、「活躍いただきました。また、伝統ある小倉郷土会の創立メンバーのひとりでもあり、北九州森鷗外記念会の会長も十五年にわたって務められるなど、地元の文化振興に多大なる貢献をなされました。」

特に松本清張記念館では、最後まで運営委員長と友の会会長として「指導いただきました。これらの功績に対し厚く御礼申し上げます。どうか安らかに永眠されますよう心からお祈り致します。」

## 馬渡 博親

小倉郷土会会長

小林安司先生を偲ぶ

## 小林安司先生年譜

明治四十三年（一九一〇）七月十五日 誕生

小倉市（現・北九州市小倉北区）に商家の長男として生まれる。

大正十二年（一九二三）

米町男子尋常小学校卒業

旧制小倉中学校（現・小倉高校）、旧制佐賀高等学校を経て、昭和九年（一九三四）東京帝国大学（現・東京大学）文学部卒業

専門は漢文学。

神崎縷々に誘われ、東大俳句会に入会。昭和七年、小倉に帰省した折に梅屋旅館で行われた橋本多佳子歓迎会に出席。

倉敷実業学校教諭、福岡県中野明善校教諭、陸軍幼年学校教授、西南学院専門学校（現・西南学院大学）教授などを歴任

昭和二十五年（一九五〇）

北九州外国語大学（現・北九州市立大学）教授就任（七十四年に退職、名誉教授）

学生部長などもつとめた。学生から慕われ、自宅を訪ねる卒業生をいつも歓迎していた。

昭和二十七年（一九五二）

第二期小倉郷土会に参加 清張と知り合う

小倉郷土会は戦時中活動を停止していたが、二十七年菅田共助を代表として復活。小林先生も世話人のひとりに名を連ねる。以後、会報『記録』に多数の論文を発表。第四回例会から参加した清張とも親



米町男子尋常小学校に通っていたころ



東京帝国大学入学のころ



倉敷実業学校時代文芸部顧問として

やいました。図書館に「松本清張コーナー」を新設されそこに清張先生の本を寄贈されたのが縁で小倉に来られた時、小林先生との時間の調整を私に指示されたのが始まりでした。

それから時が経ち、小倉に「松本清張記念館」を誘致するにあたり、誘致建設計画委員会、建設準備委員会、資料収集委員会、又開館後の運営委員会と会の名称は変わりましたが、それぞれの委員長を歴任されました。文学に対する造詣が深く、大変謙虚なお人柄でいらつしやると同時に立派な人格者でございました。

これから先私は、先生の後ろ姿を何百分の一でも学べたらと思っております。 合掌

## 神崎 義夫

北九州市立大学名誉教授  
小倉郷土会会員

小林先生を偲ぶ

小林先生は、小倉郷土会の第九回例会(昭和二十七年六月二十日)にて、新入会員の松本清張氏を紹介された。清張はその後五回出席したが二十八年十二月には小倉を離れて上京した。

先生は郷土小倉の文化的土壌の保存、開発には特に熱心で、清張記念館の小倉建設にも、公私ともに労をいとわず、実現に努力された。またその維持、管理から活用まで、常に熱心な姿を見受けた。北九州の文化にとって大切な人だった。

## 木下 圭子

北九州市立中央図書館職員

小林安司先生を偲んで

思えば三十二年も昔の小倉図書館時代、鶴外研究家の先生がよく門司新報を見に来られていました。「読書会四季」の担当だった私は、先生に講師になっていただいたり、北九州大学の先生方を紹介していただいたり、大変お世話様になりました。昨年末中央図書館に来られ「劉寒吉詩集をあなたに」と思いましたね」と何時も変わらぬお優しい面差しを残して…。先生が亡くなられたとは、今も思えないのです。

## 小林 慎也

梅光学院大学教授

小林先生は、清張記念館開館以来、企画展などで懇切なご指導をいただいた。先生は、明治四十三年のお生まれ、清張さんとほぼ半生しか違わない同世代人である。住まわれたところも二キロと離れていない。同じ時代の小倉の空気を、私たちは先生を通して知ることができた。しかも、私には、先生が中央図書館長のころ、清張さんから著書の寄贈を受けたときのいきさつを直接うかがう機会があった。二人の明治を大切にしたいと改めて思う。

## 庄司 一平

幼なじみ・友の会会員

大きい兄ちゃん

幼少の頃家が隣り合わせ、親の代からのお付合でした。小林家では、妹さんが長兄を大きい兄ちゃん、次兄を小(こ)まい兄ちゃんと呼

若輩もの私に、痛み入るほどにあたたかく、慈愛にみちたまなざしで遇していただいた。「小倉郷土会」の行末を案じられ、お致なられる直前病床より便りを、奥様からは伝言をいただいた。五十年近いご交誼にご指導に感謝し、あのやさしい微笑のお顔を憶ひつ、心から先生の二冥福をお祈り申し上げます。 合掌

## 吉田 美知子

小倉郷土会会員

清張先生も小倉郷土会に在籍した時代がある。昭和の初期に発足した小倉郷土会は、昭和十年機関誌『豊前』を発行し十二年十二月第九号まで刊行された。その後『記録』と改め現在に到っている。

『豊前』刊行当時のことを書き遺して置きたい。小林先生は亡くなられた先輩の鎮魂と後輩の奮起のために決意されたのではないのでしょうか。無常にも未発表の儘の御他界は残念でございます。何卒安らかに眠り下されませ。 合掌

## 藤井 康栄

松本清張記念館館長

小林安司先生は、松本清張記念館の開館準備段階から、親身に励ましていただいた方のお一人でした。亡くなられたとき運営委員長を務めていただいておりますが、直前まで常に期待の言葉を掛けていただき、それが責任となり励みでもありました。

私が記念館の館長として、北九州に生活の全てを移すかどうかと迷っていたとき、東京に残るよう勧めてくださいましたが小林先生でした。「東京にも足場があったほうがいいんじゃないですか。東京での仕事は多いと思いますよ」と言われました。それで私の心も決まりました。先生「自身、東京で青春時代を過ごされた経験があり、そう言われたのかも知れません。今になって振り返るとあの一言はとても大きなものでした。実際に首都圏での仕事は予想以上に多いのです。先生の「助言のおかげで何とか記念館の仕事も軌道にのりました。記念館にとってかけがえのない柱石を失うこととなり、誠に残念でなりません。つらいお別れですが、これからも先生の温顔を胸に職員と共にがんばります。ほんとうにありがとうございます。」



(五十音順)

東京の清張宅を訪問した  
小林先生に清張が描き送った色紙

交を深める。第九回例会の「森於菟博士を囲む会」では、清張を森鷗外の長男、於菟氏に紹介する。二十八年の清張の芥川賞受賞祝賀会にも出席。小倉時代の清張が小林家を訪問したことも。



昭和27年、森於菟氏を囲む会  
前列左より2人目が小林先生  
中列左端が清張

昭和四十九年(一九七四)〜五十九年  
北九州市立中央図書館長

昭和五十年の図書館開館に際し、東京に清張を訪ねて著書の寄贈を依頼。かつて図書館の本に親しんだ清張は快諾。図書館には今も『清張文庫』があり、市民に親しまれている。

北九州市の社会教育委員、文化財を守る会会長などもつとめる。

昭和五十七年(一九八二)  
勲三等旭日賞の叙勲を受ける

昭和六十年(一九八六)  
平成十二年(二〇〇〇)

北九州森鷗外記念会 会長

森鷗外「小倉日記」の精細な注釈で知られる小林先生は、北九州森鷗外記念会の初代会長に就任。記念会は、森鷗外の文学碑の建設や旧居の保存を市に働きかける活動などを継承し、研究を続けた功績が認められ、平成十年、第五十八回西日本文化賞を受賞。

平成五年(一九九三)から、松本清張記念館誘致建設委員会会長等歴任のうち、平成八年より初代運営委員会委員長に就任。平成十三年より友の会会長も兼任。

平成十四年五月十一日

永眠 九十一歳



昨年4月記念館で  
講演する小林先生

# 謙抑の人

北九州市立美術館長  
北九州森鷗外記念会 会長

谷 伍平



たに ごへい

東京大学法学部卒業。昭和14年鉄道省入省後、国鉄常務理事西部支社長、東海道新幹線支社長等を経て昭和42年から62年まで北九州市長。昭和62年4月より北九州市立美術館長。大正5年生まれ。

小林安司先生に最初にお目にかかったのは、いつどこであったか。多分、作家の劉寒吉さんや郷土史家の米津三郎さんとの係わりで、お会いしたにちがいない。

先生は、至って控え目な御性格で、御生涯の回顧とか、専門の漢文学の御業績の自慢話など、一切なさらなかった。あれほど森鷗外について深い蓄積がお在りであったのに、論文集を残されなかったのは、残念で仕方がない。

美術館にはよく足を運ばれた。目ぼしい展覧会には、欠かさずお出かけ頂いた。そのたびに館長室をのぞかれ、ゆっくり身を入れてお話をされて帰られた。浮世絵を寄贈されたこともある。

平成三年十月に市立歴史博物館で、「小倉城下町の商家由来記」と題する先生の御講話を拝聴した。幕末の小倉の繁栄をになった豪商の一人で、総年寄を務めた岩田屋・小林安左衛門(酒造家)さんが先生の祖父に当られること、宝町二丁目の紫川右岸に白壁の酒蔵が威容を誇っていたことなどを、その時知ることができた。

先生が亡くなられた後、書齋の資料を整理

していたところ、小倉郷土会の機関誌『記録』の第二十四冊(平成七年二月刊行)が出てきた。先生の「豊前小倉の一町家に見る旅日記」という論文がのっている。「一町家」というのは、もちろん小林家のことである。旅日記は、寛政三年の旅日記、弘化三年の「海陸惣日記」、明治二年の「海陸安全記」の三冊であり、執筆者は安司先生のそれぞれ、高祖父(祖父の祖父)、祖父、伯父に当られる。

先生が早くから劉さん、米津さんなどと郷土史の研究にうちこんでこられたのは、先生の御家柄の然らしめるところでもあったのである。昭和四十九年に市立中央図書館が完成したとき、劉さんの御推薦を受けて、先生に初代館長を御引受け頂いた。先生は小倉中学校時代から、小倉市立図書館の熱心な利用者であられたよして、新しい図書館長に欣然として就任された。

新館の計画に当って、私は何冊かの図書館学の翻訳本を読んだが、そのなかに英米では公共図書館のことを「庶民の大学」(ピープルズ・ユニヴァーシティ)と呼びなわわしているところだったので、これを新しい図書館づくりの目標にし

ようと先生と申し合わせた。先生は早速ヨーロッパ七都市の図書館を視察され、その見聞を図書館運営に生かされた。先生はまた東京に松本清張氏を訪れて、氏の刊行された図書千七十九冊を寄贈して頂く約束をとりつけるといつヒットを飛ばされた。

昭和四十五年十二月発行の『記録』第十五冊を先生に直接贈られた。先生の「森鷗外の『戦論』訳述」と題する論文が掲載されている。その前年に行橋市の陣山家で発見されたクラウゼヴィッツ著『戦論』を森鷗外が訳述した原稿について小林先生が解説されており、先生の

鷗外研究の一端を窺うことができる。私が市長退任後、遅れて鷗外学徒の仲間入りをしてから、先生は親切に関連資料を教示され、論文執筆のヒントを与えて下さることにしばしばであった。

先生ほど筆まめな方を知らない。図書館のこと、郷土史のこと、鷗外記念会のことなど、なにか御連絡申し上げると、木霊のように御返事が返ってきた。もはや先生のあの懇切をきわめた御助言を頂けなくなったと思つた、言い知れぬ淋しさを覚える。

を悼む

小林先生に初めて会ったのは、門司市立図書館に勤務していた昭和三十年ころであったと記憶する。

その当時、先生は北九州大学の教授をされていたが、地方史研究に興味を持たれて、北九州各地の図書館などを訪れて、地方史の収集に熱心であった。市町村史はもとより各地の郷土会の出版物などの収集にも力をつくされていた。ちょうどその頃は、戦後の混乱が終息して、各地に郷土会、郷土史会が続々と設立されていた。北九州の旧五市にもそれぞれの会が設立されて、機関紙が発刊されていた。先生はこれらを全部収集されていたようである。先生も研究に熱心で、小倉郷土会の機関紙「記録」に論文を数篇発表されている。その中でも、森鷗外研究には、最も力をつくされていたようである。

惜しむらくは、以上の研究が単行本化されていないことである。

先生との関係が密接になったのは、昭和五十年の北九州市立中央図書館開館からで、それからの五年間、先生の下で勤務した。先生の館長時代は、特に取り上げる話題は無いのであ

るが、欠かすことの出来ない功績は、松本清張さんに交渉して、その多数の著書の寄贈を受けたことであろう。これは特筆大書すべき功労である。やはり形あるものを遺された功は大きいものがある。

先生は自分のことは殆んど語らない人であった。例えば、東大の学生時代、東大俳句会に出席されて句作されていたことなどは、かなり近年になって語られたことである。今にしてみると、もっと詳細に話を聞いておけばと悔んでいる。

東大時代の先生の恩師は、井上哲次郎教授で、その写真を応接間に飾っておられた。署名入りのものであった。

井上哲次郎教授は、現代でこそ余りに知られていないが、東大教授として、日本倫理学の祖で、その著には「日本陽明学派之哲学」「日本古学派之哲学」「日本朱子学派」の三部作がある。筆者などは、「孝女白菊詩」の著者として記憶している、この詩は後に、落合直文によつて新体詩化され有名になった。井上教授のことも聞きたかったが、少しばかり伺ったのであるが、何を聞いたかは覚えていない。

先生が九十歳になられたとき、長寿のコツは何ですかと聞いたところ、先生曰く「君、それは粗食と散歩だよ。」この言葉は今に耳に残っている。以前、図書館が大手町の旧造兵工廠の工場に仮事務所を置いていた頃、近くの理髪店に馴染まれて、それ以後、大谷池の自宅から木町まで歩いて通われた。これは入院される直前まで続いていたようである。こんな律儀な面もあった。残して置きたい話である。

## 小林安司先生 を偲ぶ

小倉郷土会会長

今村 元市



いまむら もといち

二松学舎専門学校(現・二松学舎大学)卒業。  
下関工業、戸畑高女、戸畑高校教員を経て昭和28年から門司市立図書館に勤務。昭和50年北九州市立中央図書館創立にともない同館に転任。北九州資料室担当。元梅光女学院大学助教授。現在、松本清張記念館運営委員、郷土史家。大正10年門司生まれ。



昨年11月 友の会のメンバーと大分富貴寺で

# 小林安司先生

松本清張  
没後10年記念  
特別企画展

# 「黒い画集・展」

期間: 8月1日～10月31日  
会場: 記念館2階ホール

『黒い画集』は、昭和33年10月5日から35年6月19日まで『週刊朝日』に連載された、推理小説の連作集です。中短篇の連作は清張にとって新たな挑戦でした。また以後、清張独自のスタイルとして、『絢爛たる流離』や『黒の図説』など数々の秀作へと受けつがれていきます。

『黒い画集』の各作品は当時、推理小説として非常に新鮮で、映画監督や脚本家を惹きつけました。清張作品の映画化は35本を数えますが、『黒い画集』からは三作品が映画化されています。

初公開となる全作品の原稿を中心に、取材の様子や映画関係資料などの展示を通して、『黒い画集』の世界を紹介しています。



会場風景

## I 『黒い画集』をひらく前に

当時の『週刊朝日』編集長扇谷正造氏の回想や、「遭難」取材登山の裏話・写真などを通して、『黒い画集』誕生の経緯を紹介。



↑『黒い画集』  
作品収録著書

〈主な展示品〉  
『黒い画集』著書、「遭難」取材登山の写真、『随筆 黒い手帖』（『紙の登攀』収録）など



←「遭難」  
取材登山の写真

## II 『黒い画集』をひらいて

全9話の原稿を展示。昭和30年代の原稿は大変希少で、今回初公開である。当時の掲載誌も併せて展示。

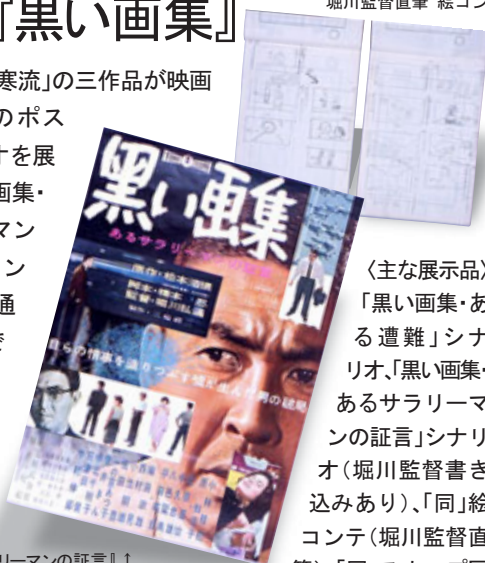


↑「証言」  
の原稿

〈主な展示品〉  
「遭難」「証言」「坂道の家」「失踪」「紐」「寒流」「凶器」「濁った陽」「草」各作品の生原稿、『週刊朝日』各作品の掲載誌など

## III 映画になった『黒い画集』

「証言」「遭難」「寒流」の三作品が映画化された。そのポスターやシナリオを展示。特に「黒い画集・あるサラリーマンの証言」の絵コンテは、堀川弘通監督の直筆で普通目にすることの少ない興味深い資料です。



↓『黒い画集・あるサラリーマンの証言』堀川監督直筆 絵コンテ

〈主な展示品〉  
「黒い画集・ある遭難」シナリオ、「黒い画集・あるサラリーマンの証言」シナリオ（堀川監督書き込みあり）、「同」絵コンテ（堀川監督直筆）、「同」スナップ写真など

『黒い画集・あるサラリーマンの証言』↑ポスター（松永武氏提供）

## IV 連作推理小説の系譜

『黒い画集』から続く「連作推理小説」の作品を紹介、著書を展示。



〈主な展示品〉  
『影の車』、『絢爛たる流離』、『黒の様式』、『ミステリーの系譜』など

# 友の会活動報告

ただいま新規会員を募集しています。

## 文学館見学会

4月26日・27日  
参加者21名



今回は吉備路文学館(岡山市)とふくやま文学館(福山市)を訪問しました。吉備路文学館では、冒頭に千田洋右館長に館の紹介をしていただき、開催中の企画展を見学しました。ふくやま文学館では単なる見学にとどまらず、友の会としては初めての試みとして、先方の友の会と意見交換会を行いました。懇親会などを通じて会員間の交流も図ることができ、有意義な見学会となりました。

## 映画上映会

6月22日  
参加者49名



平成13年度最後の事業として、清張原作の映画「鬼畜」を題材に、“シネマトークとビデオ上映会”を実施しました。北九州シネマサロン代表の松永武氏をお招きし、清張映画や映画監督、役者などについてのエピソードをふんだんに語っていただきました。また、当時の記者会見の様子や、映画のスナップ写真、映画のパンフレットなど、貴重な資料も併せてお持ちいただき、映画の魅力が一層感じられる上映会となりました。

# 松本清張 没後 10年 記念事業

2002年  
～12月31日 (火)

## ● 清張作品映画祭

会場 男女共同参画センター・ムーブホール

【第1回】10月5日「土」14時

映画 「霧の旗」「ゼロの焦点」

【第2回】10月19日「土」14時

講演 講師 堀川弘通(映画監督)  
映画 「黒い画集」  
「あるサラリーマンの証言」  
「黒い画集・ある遭難」

## ● 清張忌俳句大会

期日 11月15日「金」

会場 小倉リーセントホテル  
講演 坪内稔典(俳人・船団の会代表)  
※事前投句募集 8月4日「日」～9月30日「月」

没後十年記念出版

## 『点と線』

画・風間完 文藝春秋  
A5変型／上製カバー装／三二頁  
本体価格〇〇〇円(税別) 好評発売中

## ● 関連事業

映画祭「松本清張／映像の軌跡」

松本清張原作映画22作品を上映

期間 8月3日「土」～10月25日「金」

場所 小倉シネシティ有楽

料金 一〇〇〇円(2本立)

市民、来館者、友の会会員の声の募集

好きな作品・映画、メッセージ等を募集します。

期間 9月～10月末日(2ヶ月程度)

ドラマ紀行

清張作品の舞台を訪問します。

1 期間 9月22日「日」～24日「火」

場所 能登金剛(ゼロの焦点)

2 期間 11月8日「金」～9日「土」

場所 島根亀嵩(「砂の器」)

演劇祭(北九州演劇祭参加)

「劇団C4」が清張作品を戯曲化して上演。

時期 10月11日「金」～13日「日」

20時開演

演目 「張込み」

場所 スミックスホール・ESTA

松本清張クルーズ

豪華客船「はしかつくひいなす」での旅

10月21日「月」～23日「水」

横浜港出港・門司港入港

松本清張記念館見学

【船内イベント】夜連続講演(阿刀田高

松本清張原作映画の上映(張込み)等

## 北九州文学マップ — 神崎 武雄

神崎武雄は、昭和十七年、「寛容」その他で第十六回直木賞を受賞した。

受賞後、多くの作品を発表する間もなく

海軍報道班員として南方に赴き、その途中、

乗船していた船が撃沈されて死亡した。戦

死したのは、代表的著作『寛容』が発行

されたわずか半年後の昭和十九年九月

十七日、三十八歳の時であった。

神崎武雄は、明治三十九年門司市(現在・

北九州市門司区)に生まれた。早稲田大学中退

後、都新聞に務める傍ら、創作活動に励んだ。

昭和十四年、島源四郎は創作勉強会「十五

日会」を組織(翌年「新鷲会」と改称)し、長谷

川伸がその指導に当たった。会員には、山岡荘八、

村上元三、山手樹一郎とともに神崎武雄も名

をつらねている。

生家は門司港の旅館であった。生家の旅館は

門司港の中心、現在の門司区本町あたりと思

われる。(中野 吉明)



大正時代の生家周辺



現在の生家跡周辺



「寛容」昭和19年刊

## 第4回 松本清張研究奨励事業 入選企画発表

斬新な研究企画を全国公募し、入選者に奨励金を支給する「松本清張研究奨励事業」も第4回を数えました。今回も、ジャンルを越え幅広い活躍をした松本清張にふさわしく、文学・現代史・古代史研究、映画・演劇関係など多彩な分野から十六点の応募がありました。入選は下のとおりの一点で、地道な書誌情報の調査・整理ですが、「審査講評」でも今後の松本清張研究の進展のためには不可避の研究企画として、高く評価されました。

### 「松本清張書誌情報の調査・整理及びデータベース化」

佐藤 芳子 司書

## 第5回

## 松本清張研究奨励事業募集

松本清張記念館では、松本清張の作品や人物像についての研究活動の推進を目的に、松本清張研究奨励事業を実施しています。現在、第5回の研究企画を募集中です。詳しくは記念館までお問い合わせください。

### 募集要項

- 対象** ①松本清張の作品や人物像を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人または団体も可。
- 内容** 入選者(団体)に200万円を上限とする奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など(様式は自由、ただし、日本語)を、平成15年3月31日までに応募してください。



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス J R: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
バス: 小倉北警察署前/NHK前下車  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

「松本清張研究会」

## 第6回研究発表会

6月15日、「第6回研究発表会」が立教大学で開催されました。学生や一般の方々も多数参加され、約50名の参加者は熱心に聴講していました。

講演は詩人で明治学院大学教授の天沢退二郎氏、研究発表は会員で金沢大学助教授の仲正昌樹氏が行いました。演題並びに内容は以下のとおりです。

### 講演

#### 『清張作品における〈詩人〉 ——「表象詩人」を中心に』



松本清張における《詩人》を語る上での〈前置き〉として、「行者神髓」(昭和48年3月～49年3月、4回連載 『別冊文藝春秋』)を取りあげ、坪内逍遙の「虚名・虚空と屈辱・自負のはざま」にある「屈折の根底を司るものは何か」、清張はそこに何を見たかに迫られました。作中の〈わたし(物書き)〉と影のごとき(男)の対話、及び(男)から送られてきた資料とその〈わたし〉の読みの分析に、英国の「聖杯探索」における成立過程の分析を重ね、この怪しい(男)、〈熱海生〉こそが「物語のobsession」の化身としての「影」であり、清張が本作に与えた「行者神髓」というタイトルは、「物語のobsession」が逍遙における〈物書きのデモン(魔)〉であることを、松本清張は主張していると論じられました。

### 研究発表

#### 『清張文学の間テクスト性 ——「Dの複合」について』



「テクストは他のテクストと絶対どこかで関係性をもっている」という〈文学の間テクスト性〉の概念を使って、「Dの複合」における、民俗学的資料への言及と再構成及び新テクストの構築、〈事件〉、時刻表、地図という別種のテクストの挿入など、様々なテクストの連関とその間テクスト的な「解釈」を分析されました。その上で、本作はテクスト生成の仕組みを、主人公の取材ノートという形をとりつつ、作者の手口も暗示しながら、テクスト同士の繋がりを読者にも考えてもらう形で展開している、と締めくくられました。

### ● 編集後記 ●

節目の10号で小林先生の訃報をお伝えしなければならないのが残念です。先生の遺志を受け継ぎ、さらに充実した紙面づくりに頑張っていきます。特集記事の関係で、今回は「みんなの広場」「展示品紹介」「探検!清張記念館」はお休みさせていただきます。(中野 吉明)

